
靈感

かずいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靈感

【Nコード】

N7379K

【作者名】

かずいち

【あらすじ】

主人公の女の子の周りで起こった不思議な話です。

私って小さいころから見える体質だったの。
なに見えるかって？

そんなの、決まってるじゃない。

お化けよ、お化け。

幽霊、妖怪ともいうのかな？

よく分からないから全部お化けって呼んでるけど、とにかくよく不思議なものを見てた。

小学1年生くらいのときに住んでたマンションにもお化けはいたわ。私の部屋は3階にあっただけけど、行くにはエレベーターを使わな
いといけなかったの。

で、ある日ね、友達のマミちゃんと遊んでたら帰るのが遅くなっちゃった。

私、ママに怒られると思って走って帰ったわ。

でももうマンションの前に着くころにはすっかり日が暮れてて。しょんぼりしながらエレベーターが来るのを待ったの。

で、乗ろうとしたらね、人が乗ってるの。着物姿のお婆さん。でもなにかおかしい、降りようとしらないのよ。

1階で止まったんだから、上から来たなら降りないとおかしいですよ？

でも降りないの。このマンションに地下なんてないし。だから話しかけたの。

「おばあさん降りないの？」

って。そしたらお婆さん、私のほうを睨んでね、すう…と消えたの。

家に帰ってからママに全部話したわ。ママったら急に顔色変えてね。誰かに電話してなにか話してるの。それから2ヶ月後くらいかな。パパが転勤することになって違う県に引っ越すことになったのは。単身赴任じゃなくて、私たちも着いていくことになったのは、私が話したことを信じてくれたからかな？

子供の言う事を真剣に聞いてくれるような良い両親をもって、私って幸せ者よね。

中学校に入ってから不思議な体験をしたわ。友達と一緒に学校から帰ってたらね、電柱の陰におじいちゃんがいたの。

隣の県に住んでるはずなのに。だから私、

「おじいちゃん？なにしてるの？」
って聞いたの。

でも、おじいちゃんは何も答えずに私を睨んでたわ。

よく見たらおじいちゃん、足がなかった。

私は小さいころにお化けを見たことあったから平気だったけど、マミちゃんたちは走って行っちゃったわ。

ママにそのこと話したら、顔が青ざめてるの。

ママったら大人なのに怖い話が苦手なのね。可愛いでしょ。

でも、その次の日におじいちゃんが死んじゃったって電話が来たの。私は思った。

きっと死ぬ前に私に会いに来てくれたんだ。

悲しかったけど、そう思うとなんだかちょっと嬉しかった。

ママはその電話を受けたとき、「そうですか…」って一言だけ答え
たわ。

なんとなく、ママはおじいちゃんが死んじゃうって分かってたような気がした。

それから、ママは少し変わったの。

なんだか私のことをとても心配するようになって。

学校が終わったら早く帰ってきなさいだとか、いけない友達とは付き合っちゃだめ、というようなことをしつこく言ってくるようになった。

きつとおじいちゃんが死んでから寂しくて、私に少しきつくあたるようになったのね。

おじいちゃんの三回忌にまた不思議なことがあったの。

でも、とても悲しくって、不思議なこと。ママが死んだのよ。自殺だった。

パパが寝室で死体を見つけたの。

信じられなかったわ。

あのママが死んじゃうなんて。

どうして？

私は悲しくってお通夜でもずっと泣いてたわ。

その日の夜、私が泣き疲れて眠っていると、枕元にママが現れたの。驚いたけど、私は必死に叫んだわ。

「なんで自殺なんかしたの！？どうして私たちをおいて行っちゃったのよ！？」

「あなたを救おうとしたけど無理だったの…。」

え…？

どういうことなの？

分からないよママ！

「私の家系は代々靈感の強い一族だったの。
日本なら陰陽師だとか、イタコだとか呼ばれてた、そんな一族だった。」

まだ幼い頃にね、あなたに悪いものが憑いてしまったのよ。
放っておいたらあなたの命を奪ってしまう悪いものが。

ずっと前に死んでしまったあなたのおばあちゃんも、あなたを守るために現れたでしょう？」

まさかあの時見たおばあさんは…

「私のお父さん、つまりあなたにとってのおじいちゃんに相談したわ。」

そして、私とおじいちゃんは決めたの。

あなたを守るためにその悪いものを追い払おうって。

だけど私とおじいちゃんがどう頑張っても悪いものはあなたから離れようとしなかった。

それどころか数を増やしてあなたに付きまとうようになってしまったの。

だからおじいちゃんは私に黙って、命を懸けてそれを追い払ったわ。」

そっか…会いに来てくれたのは私が助かったかどうか見届けるためだったんだ…

「でも…しばらくしてまたその悪いものは現れてしまった…おじいちゃんがいなくなった今、私1人であなたを守るのには無理があったわ。」

だからおじいちゃんがやったように命をかけてあなたを守る他に方法がなかったの…ごめんね…寂しい思いをさせて…許して…」

ママの声が遠くなっていく。私はママのほうに手を伸ばした。

「待つてよ！ママ！」

「ずっと…元気でね…」

ママの声は完全に消えてしまった。

私の手にはママの温もりが、頬には出し尽くしたはずの涙が流れた。

これは絶対に…夢じゃない。

それから今まで、立ち直るのは大変だったけど、ようやく元の生活を取り戻せてきた気がするの。

おじいちゃんとママがいなくなっちゃったのは寂しいけど、それって私のことずっと心配してくれたからなんだよね。

ママたちが守ってくれた命に恥じないように、頑張って生きていこうと思うんだ。

ねえマミちゃん。

小さい頃からいつも私が辛いときにはそばにいてくれて、ありがとうね。

ほんとマミちゃんは親友だよ。

あれ？

マミちゃん？

どこに行っちゃったの？

なんだ。

そこにいたんだ。

いつの間にお友達なんて連れてきたの？

そんなに人がいっぱいいたら、どこにマミちゃんがいるのか分からないよ。

え？

これからみんな面白いくところに行こうって？

いいね。

行くうよ。

あはは。

笑ってるマミちゃんなんて、初めて見たよ。

痛いなあ。みんな引く張らないで。すぐに行くからな。

ねえマミちゃん、面白いとっさってどっさっ。

「あんだのママのじいさだめ」

(後書き)

初めて投稿させていただきました：小説を書くのも初めてだったので読みにくい文章&意味不明な内容になっているかもしれないが、暖かい目で見てくれれば嬉しいです。また、最後まで読んでくれた忍耐強いあなたには土下座してお礼を言いたいです^^：皆様の感想をお聞かせいただけたら次の作品に生かそうと思いますのでよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7379k/>

靈感

2011年1月16日05時11分発行